

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲第 951 号	氏名	伴 碧
論文審査担当者	主 査 森泉 哲次 副 査 村田 敏規・多田 剛		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>人類学によると、日本人は、土着の縄文人と、東アジアから移住してきた弥生人に分類される。弥生人は、狭い瞼裂、一重瞼の厚い耐寒性のある構造の眼瞼を持ち、高い位置に丸い構造の眼窩上縁があった。一方で、縄文人は、大きな瞼裂の二重瞼で、眼窩上縁は平らで低い位置にあったと報告されている。また、内側眼窩縁と外側眼窩縁の間の眼窩脂肪下端のスペースに下位横走靭帯（以下 LTL）が存在し、それにより狭い瞼裂、一重瞼、重たい瞼が形作られることが報告されている。それらの形態は、弥生人の顔貌の特徴でもある。現代日本人は、縄文人と弥生人の特徴を持っている。一重瞼であるということは、眼瞼前葉が折れたたたまれないこと、視野を保つために眉毛挙上する必要があることを示しており、二重瞼であるということは眼瞼前葉が重瞼線で折れたたみ可能なので、眉毛挙上しなくても十分に視野が得られるということを示しているのではないかと伴らは考えた。このことにより弥生人の子孫か縄文人の子孫であるかどうかを見極めることができるのではないかと考え、伴らは今回の検証を行った。</p> <p>検証は 6 6 名の日本人（典型的な一重瞼群 33 名、二重瞼群 33 名）手術患者を対象に行った。まず、指で眉毛を動かなくすると開瞼が制限を受けるか、次に、LTL の発達程度により日本人を一重瞼と二重瞼に分類できるかについて伴らは調べた。</p> <p>その結果、以下の成績を得た。</p> <p>(1) 眉毛を押さえると、一重瞼群は 33 人全てが開瞼できなかったが、二重瞼群は後天性眼瞼下垂症であっても開瞼できた。</p> <p>(2) 眼窩隔膜の背側にある LTL は、33 人の一重瞼群中 23 人で 1 本であり、10 人が 2 本かそれ以上だった。二重瞼群では、33 人中 18 人で 1 本で、13 人は 2 本かそれ以上、2 人ははっきりしたものがなかった。一重瞼群では、眼窩隔膜下部の背側にある LTL の中で最も尾側のものの太さの平均は <math>1.15 \pm 0.44\text{mm}</math> で、これは二重瞼群の平均 <math>0.88 \pm 0.45\text{mm}</math> より <math>p = 0.0136</math> で有意に太かった。顕微鏡下に組織学的検証を行ったところ、一重瞼群の LTL の膠原線維は二重瞼群より太かった。</p> <p>以上より、伴らは発達した下位横走靭帯は開瞼の抵抗となり、瞼の折れたたみを制限し、日本人の瞼を一重瞼と二重瞼にわけられると結論した。そして、一重瞼か二重瞼かというのは弥生人と縄文人の特徴でもあり、そこから現代日本人を弥生人の子孫か縄文人の子孫か見極める手がかりのひとつとなりうると考えた。主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			